

「平成23年度 真名川ダム弾力的管理検討委員会」 議事概要

○日時：平成 24 年 2 月 29 日（水）10 時～12 時

○場所：大野市文化会館 2 階 鳳凰の間

○議事内容：

■平成 23 年度の実施結果

■平成 24 年度の実施計画

上記 2 点について事務局から説明。

主な質疑応答、意見の内容は、以下のとおりである。

■平成 23 年度の実施結果

【調査項目について】

（委員）

- ・ 物理環境に関する調査状況だけでなく、生物に関する調査状況も報告して欲しい。また、その結果を土木事務所にも伝えるなど、情報共有を図って欲しい。

（事務局）

- ・ 平成 23 年は、東北地震の影響で予算が削減されたため、比較的簡単にできる物理環境調査のみを実施しており、生物調査は実施していない。生物調査をしなくてよいと思っているわけではなく、定期的に調査をして、長いスパンでどの様になっていったのか調査できるように計画したい。

【台風 15 号の影響について】

（委員）

- ・ 台風 15 号の大水の後、10 月に水辺の楽校で子供達と水生生物の調査を行ったときには、川の中が非常に攪乱されており水生昆虫がとても少なかったが、つい最近再び調査を行ったところ、多くの水生昆虫が確認できた。
出現種については、従来はヒゲナガカワトビケラが多かったが、カワゲラが多く見られるなどの変化が確認された。
- ・ 水辺の楽校の少し上流の中洲では、台風 15 号のときに柳の木がなぎ倒されており、大木が流下する危険性を感じた。
- ・ 水辺の楽校において、人工的に手を加えたところは白河原になった。

（委員）

- ・ どれくらいの流量で礫河原や砂州が出現するか把握されているのか。

（事務局）

- ・ 水際ほぐしなどで手を加えた場所の河床は年に 1 回は必ずある 100m³/s 程度の放流によって変動し、伐木を実施した場所の河床は 10 年に 1 回程度の出水によって変動すると考えている。

(委員)

- ・ 伐木等の維持管理を行った箇所と台風後に礫河原や砂州が出現した箇所との関係性は分析されているのか。

(事務局)

- ・ 今後、伐木箇所の情報を県からいただき、台風 15 号後に形成された礫河原と伐木箇所の位置情報を整理し、その関係性を分析する予定である。

【情報の収集・整理と共有について】

(委員長)

- ・ これからは、河川への行為（掘削、伐木）や出水で新たに裸地化・礫河原化した箇所、調査の結果などの情報をGISなどを用いてデータベース化し、関係者で共有と整理をするとよい。

(委員)

- ・ 奥越土木事務所において、平成 23 年 1 月から 3 月にかけて、八千代橋から佐開橋の間で伐木を、その左岸側で掘削によって滞筋を変化させる等の工事を行っているため、その情報を事務局に提供する。それを用いて融雪期の放流による変化を追跡調査できるのではないか。
- ・ 伐木の目的は治水だけでなく、野鳥など自然のことも考えている。また、河川内樹木は全て伐採するのではなく、残しつつ伐採している。伐木について、よいやり方があればご教授いただきたい。

■平成 24 年度の実施計画

【放流方法について】

(委員長)

- ・ 資料の P29 の発生頻度（放流量）について、流入量の発生頻度は他の河川でもよく議論されるが、放流量はそのときの貯水量や運用方法による影響が大きい。この発生頻度はどのように考えたらよいのか。

(事務局)

- ・ 実放流量がどれくらいの確率で起こったのかをまとめただけで、そのときの運用方法などは考慮していない。

(委員長)

- ・ 放流規模を設定する際に、どの程度の頻度を目標とするのか、また、その頻度は流入量ベースか、それとも放流量ベースで決定するのか。

(事務局)

- ・ 流入量ベースと考えている。

(委員)

- ・ 台風 15 号では、富田大橋付近で低水護岸が壊れるという災害が発生した。治水のことに留意した放流規模や頻度を設定して欲しい。

(事務局)

- ・ これまでは、溜まった水で人工的に余分に流す事をしていたが、これからは出水をダムに過剰に溜め込まずに自然のとおり流す放流を目指したい。

(委員長)

- ・ ある程度の規模の洪水によって、河道内に瀬淵等の高低差ができ、河川を活性化できる。

【自然再生試験について】

(委員)

- ・ これまでもワンドを作られているが、規模が小さいように思う。増水時に一時的に本川とつながり、流量が減少すると溜りになるような造成方法を考えたほうが管理や継続性の面からもよいのではないだろうか。

(事務局)

- ・ ワンドは、大きな出水による土砂移動で埋まってしまうこともあり、造成して定着させるのは難しいと感じている。

(委員長)

- ・ 今は直接掘ることでワンドを作ろうとしているが、水制工などの流れに張り出す構造物を設置することによって、ワンドを作ることも考えられる。

【調査について】

(委員)

- ・ 生物調査にあたっては、餌となる付着藻類の調査と底生生物の調査は実施して欲しい。

(事務局)

- ・ これからは長期的な視点で定期的に何年かに 1 回、生物調査の結果と台風や放流などのイベントを整理していきたいと考えている。

(委員)

- ・ 今回の台風による河川の状況変化はかなり大きかった。従来形成されていた淵は、砂等が沈下して埋まり、浮き石の間隙は砂礫で埋まる事となり、結果として魚類にとってよくない。
- ・ 水生動・植物の棲みかができるように、置土や河川工事の際には巨石を流心に置くことを今後も実施して欲しい。

(事務局)

- ・ 雪解け後に、巨石付近の状況を調査する予定である。巨石の投入について、今まではランダムな位置に投入しているが、このままランダムな位置に投入するのがよいか、水制工的に並べるのがよいか、色々と工夫したい。

(委員長)

- ・ 砂は溜まるだけではなく、礫を動かしやすくして、河川の活性化につながることもある。
- ・ 巨石を投入した付近の地形変化や粒度は追跡調査してほしい。また、生物調査もそのような地形変化が起きた場所に対して重点的に行ってもよいかも。また、富田大橋下流で台風後にできた砂州の物理環境・生物環境の追跡調査も行って欲しい。また、淵についても、形状や土砂移動量だけでなく、粒径の調査を行ってもよいだろう。
- ・ 置土を大量に設置するだけではなく、ツルヨシの除去等河岸を少し工夫しておくことによっても、土砂の供給や移動が期待できる。
- ・ 付着藻類調査については、置土によるクレンジング効果など、一定の結果が得られているので、これまでの視点での調査は卒業して、河床のやわらかさの調査など、新たな視点での調査へ進んだほうがよいと思う。生物調査は、新たに砂州ができたところと、砂州ができていないところの対比を確認してほしい。

(事務局)

- ・ 藻類調査については、大きな攪乱後への応答をとらえるという新たな視点からの調査を行うことも考えられる。植性図とか底生生物調査の実施やその他の調査の調査地点については、予算の調整が必要なため、今後検討したい。

(委員)

- ・ 市民団体の方とか小中学校と共同で情操教育の一環として、生物調査を行う方法もあるのではないかな。そうすればお金をかけないで調査が可能なのではないかな。

(委員)

- ・ 大野市では環境教育、ふるさとを知る教育に力を入れており、総合学習の時間を活用しながら実際に川に入って調査とか体験をすることもやっている。調査を兼ねてという様な事まで出来るかどうかかわからないが教育委員会部局に検討材料として伝えるようにする。

(委員)

- ・ 小学校の生徒を迎えて、水生生物を調べ水質判定等をしているが、現場では子供たちに水の事故がないように注意を払うことで精一杯なので、きちんとした調査データを手に入れるのは非常に難しいのが現状。

(委員長)

- ・ 小学生による環境調査は川に対する意識を向上させることが本来の目的であり、調査結果には限界があっても補完的でも良いが、科学的データをとるのはきちんとお金をかけて調査を

しないといけない。

【その他】

(委員長)

- ・ ツルヨシの除去や伐木を行った後、今はお金をかけて処分している。河川管理者、ダム管理者だけでなく地元と連携してやっていく何かよい工夫はないか。地下水調査と合わせて大野市さんの意見が何かあれば聞かせて欲しい。

(委員)

- ・ 地下水調査は、真名川の近くは放流や雨との因果関係がわかりやすいが、真名川から離れた市街地では、その因果関係がわかりにくい。洪水時の物理環境と地下水位との関係がわかれば、それに応じた事業ができると考えている。また、調査結果で報告されている 3 地点以外の地下水位データも活用して欲しい。
- ・ 畜産の糞尿と間伐材を取り混ぜた有機肥料による農業を推進しているが、ツルヨシ類をそのままの状態では使えないので、使えるように加工するが難しい。
- ・ ダムの長寿命化を図るためには、ダム周辺の森林についても考えたほうがよい。今は間伐が不十分で、少しの雨でダムに土砂が流れていくというような状況にもなる。間伐を促進し、間伐材をバイオ資源として活用することの、具体的な検討を来年度から始めようと思っている。

－ 以上 －